



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010/02/17(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 68

平成21年度 第22回北海道高等学校バスケットボール新人大会観戦記

指導者育成専門委員会 川村 健二

「速きこと風の如し・・・！」

2月5日から7日まで、札幌総合体育センター「きたえーる」で開催されたこの大会は、男子は恵庭南が決勝で東海大第四を98-96の1ゴール差で退け二連覇、3位には順当に勝ち上がった旭川大学が初の入賞、4位には札幌地区6位で出場した札幌東が旭川西のシード校を破って平成18年度以来2回目の入賞を果たした。

女子は4年連続山の手と札幌創成との決勝となったが、山の手が114-54と決勝も含め他を全く寄せ付けず、全国3位の貫禄を示して9連覇を達成、3位は帯広南商業が順当勝ちし、4位にはシード校の旭川藤を破って函大柏稜が2年振りに入賞を果たしシード権を獲得して幕を閉じた。

男子で二連覇を達成した恵庭南は、ジュニアオールスターで2年間全国優勝を果たした多くの選手を有し、当然優勝候補の一番手であった。転勤となった横嶋監督を引き継いだ森川浩コーチが、6月の高体連道予選敗退からどのように巻き返すのか、その采配ぶりが非常に興味深いところではあった。結果としては恵庭南の順当勝ちに終わったものの、東海第四との決勝戦を見る限り、攻撃リズムのコントロール、表裏一体の攻撃といった姿勢は見られず、ほとんどが表から面と向かって、しかも第四がディフェンスする暇も無いほどに早打ちに終始、相手は勞せず攻撃に転じるといった場面が続き、表現としては何かガチャガチャと落ち着かない印象は否めず、ゲームリズムを自ら壊してしまっている感があった。

決めてとなる長身選手を有していないが個々の選手の能力が高いだけに、本能のおもむくままに我こそは・・・といった攻め急ぎと速さを整理し、④高野を中心にセット状態でも裏の攻撃が出来る手段を持つ必要を感じた。

東海大第四の新チームは一回り小さくなり、やや弱体化した感はある。決勝では相手の早打ちに助けられた面もあり僅差の敗退となったが、3位の旭川大学とも接戦を演じており、従来型のセンター中心の攻守パターンに不安と物足りなさを感じるゲーム内容であった。

3位の旭川大学は個々の能力は非常に高いものを持ったチームではある。しかし惜敗した東海大第四とのゲームでは相手のプレスを突破できず何度もミスを重ね、ここぞという時の攻撃においても、4選手が全く動かずにシューターのみに任せてしまうオフェンスパターンを繰り返して結局自滅、もったいなくも決勝進出を逃してしまった。

4位の札幌東は、柴田監督が定年のため退職され、自分たちで頑張っているチームとのことであった。よくまとめ、この成績を残したことは立派という他にない。

女子においては優勝した山の手は全国3位となった力量をまざまざと見せつけ、全試合で他を圧倒、次年度の全国大会での活躍ぶりに更に期待が掛かる印象のゲームぶりであった。

その第一印象は、まさに速きこと風の如し、獲物をねらう狼の群の如く、全員が一步でも早く前に走ろうとするスタートの速さと、速攻も決して2人任せにせず、3人目4人目までもしっかりフォローさせる姿勢が徹底していることである。

新キャプテン④町田を軸としたガード陣が第一線でほとんど抜かれることなく、守りではなく奪い取る・・・という意識を前面に出して、全員が常にプレッシャーを掛け続けるディフェンスも強力な武器となっている。

もう一つ印象深いのは、ボールに対する指先の更に先まで意識して、ボールスナップ、リバンドやルーズボールを追い続ける姿勢である。⑥高田のオフェンスリバンドを取る勘のよさも、常日頃からそうした意識を持って取り組んでいるからこそ出来ることなのであろう。

全員がコート舞台上、指先までしっかり意識して表現する女優の如く、そのプレーぶりはある意味では小気味良い。更に著しい成長ぶりを見せている⑩センター長岡をほとんど温存しながらの戦いで、しかもゲーム運びも決して無茶や無理をするのではなく、早いパス回しから、ここぞという時の1:1の力やシュート力は目を見張るものがあった。

2位の札幌創成は、今年は例年より小粒であり決め手に欠く感があった。残念ながら山の手には大敗を喫し、準々決勝では北見緑陵に53-51とあわや破れそうになったものの、準決勝では函館柏稜を一蹴、粘り強く決勝まで駒を進めてきた。

3位の帯広南商業は、準決勝までは順調に勝ちあがってきたものの、準決勝では山の手に54-127と全く相手にされずに大敗を喫してしまった。

チームをしっかり鍛えている様子は窺えるものの、個々の力量とチーム力に差があり、ディフェンスの壁を崩せずに攻撃の決め手を欠いたまま失点を重ね、予想以上の大差となってしまった。収穫は1年生トリオが気後れせずに戦っていたことであるが、先発とどちらをチームの核とするか迷いも感じ、修正とどう経験を積ませるかが課題といえる。

函大柏稜は一見一般女子と勘違いする雰囲気を持ったチームで、要所要所で勝負強さを発揮して勝ち上がり、どうにかシード権を確保したものの、創成・南商業との試合では集中力が途切れ精一杯4位の結果に終わった。

今大会の結果はある程度予想されたものではあったが、それ以外、目に付いたチームとして、まず男子では優勝した恵庭南に1回戦で対戦した海星学院が挙げられる。

目立った長新者はいないものの6月以来しっかりと力をつけ、惜しくも90-93の僅差で敗退したが、今後どのチームも侮れない脅威の存在になることは間違いない。

また、女子準優勝の札幌創成を準決勝で最後の最後まで苦しめた北見緑陵も今回注目すべきチームであろう。過去21回大会の中で一度もベスト4に残ったことのない北見地区代表が1回戦で札幌4位のとわの森三愛を67-59で下し、準優勝チーム創成に、あわや・・・という試合を展開したことは正直驚きであった。

窺ってみたところ、平成16年度、北見地区はミニバスの全道大会で男女とも優勝し全国大会に出場している。その土壌の中で中学校時代のジュニア選抜メンバーが何人か揃っ

て緑陵高校に入学してチームを作り、今大会を迎えたとのことであった。

男子でも北見地区から道外や札幌で活躍している選手を輩出していることを聞くと、改めてミニ・ジュニアの指導の重要性を思い知らされるとともに、全国区で選手を集める時代、地区が勝っていくにはこの方法しかないことを証明してくれている。

その逆に残念な結果としては、夏の高体連時に優勝した大麻が2回戦で函館大学付属有斗高校に、同じく準優勝の旭川西が2回戦で札幌地区6位代表の札幌東に共に完敗し、シード権をも失ってしまったことである。

特に大麻は平成9年度以降12年間の中で優勝4回を含め常にベスト4以上の戦跡を残してきたチームである。今年度、長野ヘッドコーチの定年退職ということで花舞台を期待した者も多かったはずだが、結局淡白な試合内容で、あまりにあっさりとその歴史に幕を閉じてしまった。同じく旭川西も前日下部監督が指導を離れ秋月監督に変わったこともあるのか、小粒の不利な状況を跳ね除け、巻き返すねばりを見せることなく、第1クォーターで勝負有りといった内容で札幌東に早々に敗退してしまった。

選手層の違いは有ったとしても、強くするには何年も掛かりながら、弱くなるのはあつと言う間の早さということを改めて思い知らされた感がある。

女子では旭川藤女子が6月の高体連時3位入賞を果たしながら函館柏稜に破れ、2年続けたシード権を失ってしまった。チーム力は柏稜に勝るとも劣らない感じではあったが、結局最後まで走らず、守らず、もどかしく物足りないままに敗退してしまった。

その他のチームとしては、男子の函大有斗は以前指導されていた安田先生が退職後に復帰、チームも往年の元気さを幾分復活させて大麻に完勝、旭川大学に破れたものの久方ぶりにベスト8に名を連ねた。

今年度の高校の大会はこれで終了し、6月までの数ヶ月間、各チームは新入生を迎え大いに飛躍する季節を迎える。次の高体連大会には今回ベスト4に残った地区がシードとなるが、男子では室蘭の海星学院、帯広の白樺学園が、女子では札幌の北星学園女子、北見緑陵、旭川藤等が今後どのように変わり、抽選でどこのブロックに入るのか興味深いところである。

今回の大会では殊更山の手の強さ、上手さが際立った大会であった。

確実なシュート力と高さ・速さに加え様々な場面で見られた勘の鋭さ、対応する身体能力等全てがバスケットボールそのものの質とレベルが違うと言わざるをえないチーム力を備えていた。全国では、更に身体的・精神的スタミナが求められることになるであろうが、より高きレベルを目指し指導を続けてきた石田監督・上島コーチの何年にも渡る指導の結果、「速きこと風の如く、強きこと・・・」全国上位に肩を並べるチームがこの北海道に存在していることは、小中学生にも誇りと目標になっているに違いない。これまでの努力にただただ敬服するとともに、夏の全国大会を楽しみにしたい。

同時に、素晴らしい選手集団を揃えた恵庭南を筆頭とした男子にも、『普通の選手で日本一になった。』と言わしめた宮城仙台の明成に負けずに、その可能性を求めたチーム作りを心から期待したいものである。(完)